

# 入来牧場における哺乳子牛の下痢対策

池田博文

(農学部附属農場)

## はじめに

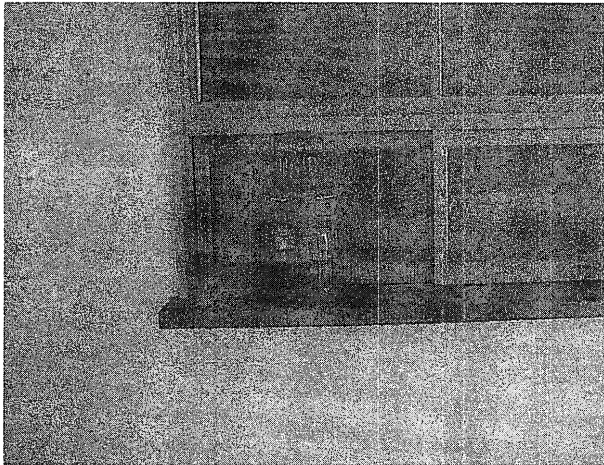
子牛の管理は、生後3ヶ月間が最も重要であり、下痢や肺炎などの発病はその後の発育に大きく影響する。繁殖農家で最も頭を悩ましているのがこの時期の下痢症状である。入来牧場では周年放牧方式で黒毛和種の子牛生産を行っているが一般農家と同様である。牧場では、発育改善のため分娩後一週間以内にサツマゲート内に移動し集中管理を行っていることから下痢や白痢などが発生しやすい条件にある。これまで主に薬剤による治療を行ってきた。それでも完治せず脱水症状を起こし斃死することもあった。そこで下痢や白痢などの発病を予防するための対策を検討し改善を進めてきた。その改善策と成果について紹介する。

## 材料と方法

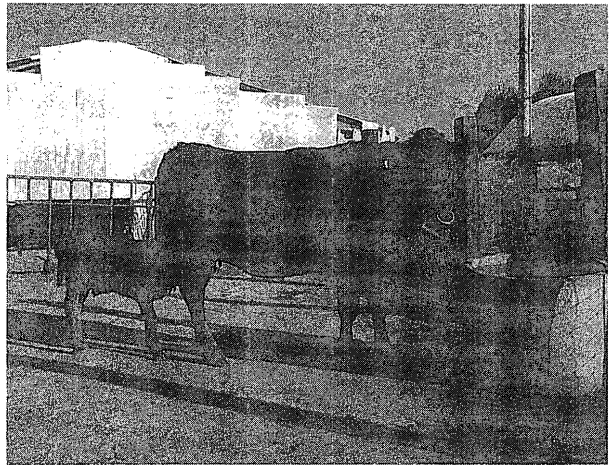
2001年12月～2002年12月までに産まれた子牛119頭を対象にこれまでの管理方法と合わせて下痢と白痢の発病予防対策をした。まず、玄米酢と生梅を5対5の割合でエキスを作った(第1図)。そのエキスとイモツルで作った天恵緑汁を混合し給水タンク内に2リットルを投入し600～1000倍に希釈し、母牛および子牛とも飲めるようにした(第2図)。また、パドック内には子牛だけが飲めるようにポリバケツ2個を置いた(第3図)。子牛用の餌は、カーフマンナ30、マンナメイト20、専管ふすま30、サナバイオサンC5、およびメイラックス10の割合で自家配合しておりその中に土着菌5パーセントを混合し採食させた(第4図)。子牛用の牛床は夏場の暑さ対策として敷料を薄めにし扇風機2機を設置し屋内の換気を良くした。冬場については逆に敷料を厚くし保温できるように発酵床にした(第5図)。ゲート内の運動場は母牛によって汚染されることから下痢などの感染を防止するため毎日清潔な状態を保った(第6図)。

## 結果と考察

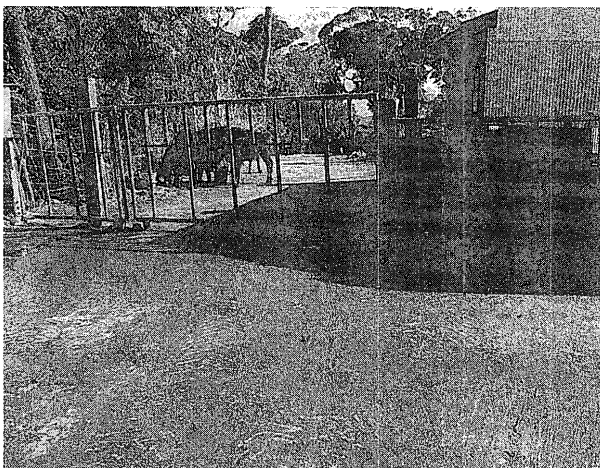
子牛は、環境整備や餌、飲水などの改善により健康が維持され下痢や白痢の発病がいずれも70%～80%程度減少した。それに伴って労力や薬品購入など経済効果も得られた。今後、下痢や白痢の発病原因になる母牛の乳頭汚染防止や乳質改善などの対策に取り組むことが重要であると考えられた。



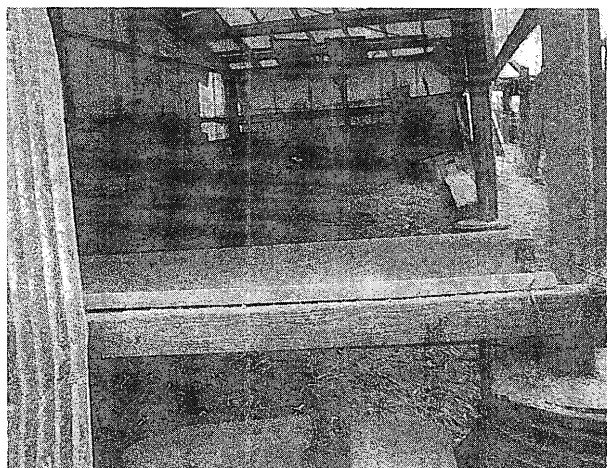
第1図 玄米酢と生梅の混合エキス



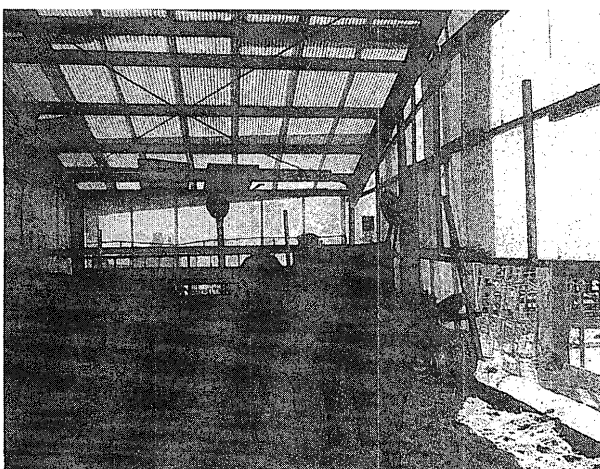
第2図 混合液の飲水場



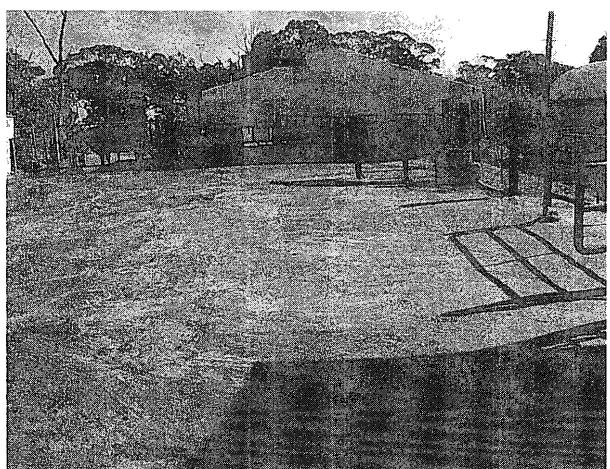
第3図 子牛の飲水状況



第4図 子牛専用の給餌場



第5図 ゲート内の発酵床



第6図 ゲート内の運動場